

講義の風景

文学部

松田美佐 助教授

Matsuda Misa

「放送・通信論」

[木曜日1限/社会情報学コース2年-4年生]

文学部で編集した『文学部解体新書——15人のナビゲーター』という冊子がある。特色のある講義・研究内容を教員プロフィールと合わせ紹介する文学部版だ。松田先生もそのひとりとして登場する。話の中心が「ケータイ電話」の社会情報学、と身近な内容で興味深かった。どんな講義ぶりなのだろう……ケータイはもちろんマナーモードに切り替えて、聴講したのである。

「きょうは、『Hakumonちゅ

うおう』の〈講義の風景〉にこの講義が載るといふことで学生記者の方が出てきますが」と先生はいったん紹介して、「いつも通りにやります」と早口で続けた。

昨年の暮れ、授業も残りわずか。そのせいだろう。後期の締めくくりへ向けて、冒頭から講義モード全開横道にそれるゆとりなどなさそうだった。1限、なのに、学生の出入もよくて、開始時間には席がほぼ埋

インターネットのよく通る声でメディア論縦横

まっていた。年明けには試験ですものね。直近の授業は要マーク……？

物というより社会空間

この日の講義は「インターネットのある社会」だった。

インターネットは「便利な道具」としてとらえられがちだが、《インターネットは、「物」というより「社会空間」である》という米学者の考え方から入る。M・マクルーハンの「メディア論」がベースにあるらし

い。「メディアはメッセージである」「ラジオはホット(なメディア)／テレビはクール」といった斬新さで1960年代に脚光を浴びた理論だが、インターネットが普及した90年代に再び注目されるようになったという。

テレビで情報を流せば一度に何億もの人に伝えることができる。《体+メディア》より大きい声。つまり、メディアを含め全てのモノは、人間

の身体を拡張するためにある、とマクルーハン理論も援用して話が続く。

「マイクもそう」と先生。「いつもは使いませんが、きょうはマイクを使っています。マイクを使えば、

声もつと遠くへ拡張する」

マイクなんかいらなくらい、しっかりと通る声である。

「同時に、マイクを使う大人数のクラスと、使わない少人数のクラスでは、同じ話をしようにも、私の話し方もみなさんの聞き方も変わらざ

るを得ないでしょう。マイクは大きな声をもたらずにだけではなく、『授業のあり方』自体を変えてしまいません」

では、インターネットとは？「インターネットとは、単なる『便利な道具』ではなく、人間そのもの、そして人間と社会のあり方を変えると考えられます」

講義が熱を帯びてきた。

まつだ・みさ 東京大学卒。同大学院人文社会科学系研究科博士課程。専攻・コミュニケーション・メディア論、ジェンダー論。東京大学社会情報研究所助手、文教大学専任講師を経て、03年から現職。編著に『ケータイ学入門』など。

韓国大統領選の

「電子民主主義」

「人間と社会のあり方を変える」。先生が例に挙げるのは、02年韓国大統領選挙でのノサモ運動である。イフエチャン、ノムヒョン両候補の競り合いが続くなかで、無党派の若者たちは自発的にノムヒョン氏の応援ホームページを作成し、中高生もそ



のサイトに集まるようになった。だが、投票日前日から投票日の午前にかけて、イフエチャン氏の有利が報道された。それを知った無党派支援者たちはホームページやメールでノムヒョン氏への投票を促し、午後にはノムヒョン氏の当選が確定したのだ。「劇的な電子民主主義」とメディアは報じた。「まだ日本では、このような事例はありません」。世界でもそうだ。やがて日本でもあり得るだろうか。インターネットが政治を変える、そんな局面が。

電子政府・電子自治体、電子投票……行政レベルの話題も盛んだ。ITの有効利用で利用者本位の行政サービスを提供することができ、業務も効率化する。他面で、住民基本

台帳導入で論議になった個人情報に關しては、セキュリティ面の課題も抱えている。

他にも、ポルノ・サイトの汨らんやウソ・なりすまし、ITを使えるかどうかで経済格差ともなる「デジタルデバイド」の問題など、IT社会の「光と陰」に触れながら、講義は、電子商取引や情報通信機器市場の現況全般に及ぶ。

企業間の電子商取引で日本の46・3兆円（02年）は、韓国の3分の1だそうである。市場規模の違いを考えるとこの差はもつと大きい。

ユビキタスの22世紀： 「みんなが、のび太に!」

最後は日本の未来のユビキタス化について。「ユビキタス」——ラテン語で「遍在」を意味するが、より端的に、「どこでもコンピュータ」と、提唱者の坂村健・東大教授が書いているのを読んだことがある。

例えば冷蔵庫と食材がユビキタス化すると、「3日前に買ったホウレン草」の具合や「牛乳がない」といった情報が携帯電話にメールで送られてくる。家の壁に情報チップを埋め

こんだスマートハウスになると、地震が起きても壁が崩れても、人間が手を加えることなしに勝手に直してくれる……だなんて。まるで「ドラえもん」の世界である。先生は冗談っぽく付け加えた。

「もし22世紀に、みんながどこでもドアを持っていたら、誰もものび太を羨ましがらないでしょう。のび太だけが持っているから羨ましいのよ」

ケータイでは子供守れない

ちょうど、奈良小1女児殺害事件が列島を震撼させた時期だった。被害者の持つGPS機能付きの携帯電話から、犯人が殺害写真のメール……。「ケータイ」がらみも不安を拡大した。改めて研究室を訪ね、先生の意見を聞いた。

「ケータイを子供に持たせることが子供の安全を守れるとは言えません。親が安心できるのは大切なことですが、電子メディアを使った一方的な監視ともなりかねません。子供だから当然かもしれないませんが、子供の安全を守るためには地域で協力しなくてははいけません」

韓国では、ケータイを使った「集団カンニング」事件もありましたね。「これは今に始まったことではなく、昔から替玉受験として存在していました。だから、起こるべくして起きた事件です。ケータイも集めず、事件を防がなかった学校の対応、大人の考えが足りない。1回で決まってしまう受験のあり方にも問題があるでしょう」

——昨年の夏、長崎の園児殺害事件の加害者の中1少年の写真が、この私へもチェーンメールで送られてきたことがある。ドキンとして、怖かった。講義で先生は、ネット特有のなりすましなどの問題性を、「身体性の喪失」と表現した。ハンドルネームで匿名化し、軽々と浮遊する身体。あくまで生身のアナログ世界に足を置いて、上手にネット社会と付き合っていくたいものだ。

マナーモードのケータイを開いてみると、着信のメールはまた「飲み会」の連絡だった。これって、身体性の回復……?」

(学生記者 大池夏未 総合政策学部2年)